

# 『王昭君變文』考

金 文 京

京都大學

## 一 内容と形式

敦煌の石窟から発見された「變文」とよばれる通俗文藝の作品群の中で、「王昭君變文」はその代表的な地位を占めるものの一つとしてつとに名高い。「變文」の定義をめぐっては、廣義、狹義さまざまな議論があるが、そのいず

れにせよ、韻文と散文を交互に用いる形式、また繪解きとしての性格を物語る「上巻立鋪畢、此入下巻」という字句や韻文を導入する定型表現「……處、若爲陳說」の存在などからして、「王昭君變文」をもっとも典型的な「變文」と見なす點で、論者の間に異論はないと思える。さらに杜甫の「詠懷古跡」、王建の「觀蠻妓」、李賀の「許公子鄭姬歌」、そして吉師老の「看蜀女轉昭君變」など、直接間接にこの

作品の存在を示唆する同時代の資料が残されていることも、おそらく他に類例を見ないであろう。

實際、「變文」の形式や定義を論じた過去の研究のほぼすべてが、不運にも寫本(Pelliot 2553)の冒頭から中半に至るかなりの部分を佚し、「王昭君變文」という題も後につけられたにすぎないこの作品を、「變文」作品の標準例として言及してきたのである。しかしそれにもかかわらず、この作品の時代背景やその文學史的な意義は、なお十全に論じられたとは思えない。

筆者は先に、前人の業績をふまえつつ「王昭君變文」の筆者なりの校注を發表したが、<sup>①</sup>ここではその校注を前提とした上で、さらにこの作品のもつさまざまな問題点を考えてみることにしたい。その前に、まず作品の内容と形式について簡単に述べておこう。

残された寫本は、王昭君が單于のもとに向かう道行きの描寫から始まっている。ついで單于との結婚の場面となり、そこで「上巻は鋪を立て畢り、此より下巻に入る」という文句があり、下巻では匈奴になじめず漢地と漢帝を思い悲

歎にくれる王昭君と、なんとか王昭君の歎心を買おうと狩を催す單于がまず描かれ、ついで王昭君の病死と盛大な葬儀の場がつづく。そして最後は、哀帝の遭わした使者が單于を慰さめ、さらに王昭君の墓、青塚で祭文を読み上げるところでしめくくられている。

次にこれを形式面から見ると、以下のようになる。

上卷

1 詩(七言二十四句) 王昭君道行き

2 文 到着と結婚

3 詩(七言二十四句) 婚禮と王昭君の歎き

下卷

1 文 王昭君の悲しみと單于の狩

2 詩(七言三十二句) 狩の様子と王昭君の歎き

3 文 王昭君の病氣

4 詩(五言二十句七言四句) 王昭君の遺言

5 詩(五言十六句七言四句) 單于の歎き

6 文 王昭君の死

7 詩(七言二十四句) 葬禮と單于の歎き

8 文 葬禮の様子

9 詩(七言二十四句) 葬禮と埋葬(青塚)

10 文 哀帝の弔問使派遣

11 詩(七言三十二句) 使者の弔問と單于の答辭

12 文 使者の青塚での弔祭

13 祭詞(韻文)

もし上卷と下卷が等分量であったと假定すると、寫本は上卷のほぼ四分の三を佚していることになる。そしてここでは王昭君が單于に嫁ぐに至った経緯がおそらくは述べられていたであろう。その中に畫工、毛延壽の話柄が含まれていたことは、下卷に「良由畫匠、捉妾陵持」(まことに畫匠に由りて、妾をば陵持めり)とあることによつて知られる。

詩は各々すべて一韻到底、平仄を整え對句を多用した律體(但し粘法は守らない)、文は四字六字を主體に句末字の平仄を交互にした律賦體であり、詩の大半が王昭君乃至は單于による一人稱の語りであることなども含めて、文が律賦體である點を除けば、その形式は基本的に後世の詞話

や彈詞などの詩讚系説唱文學のそれに等しい。<sup>②</sup>なお詩は二十四句が一應の目安になっているようである。

## 二 製作時期と時代背景

周知の如く、漢の宮女、王昭君が元帝によって匈奴の呼韓邪單于に嫁がされたことは、『漢書』の「元帝紀」や「匈奴列傳」に見える史實であった。その史實が、蔡邕撰とされる『琴操』や葛洪の名を冠する『西京雜記』に見られる如く、畫工毛延壽の話などを加え、フィクションとしてふくらんでいったこと、そして晉の石崇以來、歷代の多くの詩人が「昭君怨」「明妃曲」などによって、それを詩に詠んだこと、さらには畫題としても好まれたことなど、やはり縷説を要しまい。「王昭君變文」はこれら史實やフィクションそして先行の文學作品の傳統をふまえたものであるに相違ないであろう。しかしそれと同時に、この作品の中にそれが生まれた唐代の時代状況が色濃く反映していることも、また字句の間より容易に看取されるのである。

「王昭君變文」の製作年代については、文中に「八百餘

〔王昭君變文〕考(金)

年、墳は今上(尙)在り」とあるのが有力な手がかりとなることが、つとに指摘されている。<sup>③</sup>王昭君の歿年は不明であるが、今假りに彼女の二番目の夫である復株鞮單于が死んだ鴻嘉元年(紀元前二〇)前後とすれば、『漢書』「匈奴列傳」、八百年後は唐の徳宗の建中元年(七八〇)、八百餘年と言えばほぼ敬宗の寶曆年間(八二四―八二六)までであろう。むろんこの「八百餘年」というのは、杜甫「詠懷古跡」詩の「千載琵琶胡語を作す」、また吉師老「看蜀女轉昭君變」の「檀口知るを解す千載の事」と同巧の一種のレトリックであって、全面的に信を置く必要はあるまい。しかし徳宗、憲宗、敬宗在位のこの中唐の時代に、恰かも西漢末と同じく、塞外民族との緊張關係と彼らとの交渉、そしてその一環としてのいわゆる和蕃公主の降嫁が、後述のように大きな時事問題として人々の關心を集めていたとすれば、「八百餘年」という數字にもある程度の現實的意味を認めざるを得ないであろう。

唐代において政治、軍事上重要な意味をもった西北の遊牧民族の代表が、突厥、回(廻)紇そして吐蕃であること

は言うまでもない。うち突厥は早く太宗の時代に崩壊したが、その後を繼いだ回紇は、安史の亂に際し唐に援軍を送つてより急速に勢力を伸ばし、また吐蕃も安史の亂の際に乗じて唐の西北部に侵入して、一時は長安を占領するほどの勢いを示した。そしてこの三つの民族は、いずれも「王昭君變文」の中に何らかの形で影を落としているのである。

まずこの作品には、都合五個所に突厥の名が見える。「夫突、厥用法」「傳聞突、厥本同威」「假使邊庭突、厥、龍、終歸不及漢王憐」「昭君昨夜子時亡、突、厥、今朝發使忙」「長居突、厥之穹廬」(傍點筆者、以下同)。また王昭君が單于の居所に到着したところで、「語(契)丹を以て東界と爲し、吐蕃を西隣と作し、北は窮荒に倚り、南は大漢に臨む。當心にして坐し、其の富は雲の如し」と述べるのは、『舊唐書』の「突厥傳・上」に、「東は契丹、室韋より、西は吐谷渾、高昌諸國を盡くして、皆臣屬す。弦を控くもの百餘萬、北狄の盛んなること、未だこれ有らざるなり。陰山より高視して、中夏を輕んずるの志有り。可汗は猶古の單于」云々とあるのを想起させる。この作品は突厥の勢力が盛んであったか、

もしくはその記憶がまだ色褪せぬ時期に骨格が出来上つたと考えられるべきであろう。青塚について述べた下りで、「只今葬在黃河北、西南望見受降城」とある「受降城」も、漢代のそれではなく、中宗の時に突厥對策のため黃河北岸に築かれた三受降城のことであろう。

次に回紇については、冒頭の「□□□(胡馬?)□□(亢)搜(颯)骨利幹」とある「骨利幹」が、『新唐書』「回鶻傳・上」などに回紇の一部族名として見える。またその下の句「邊草叱(吒)沙紇邏分」とある「紇邏分」を、陳寅恪は突厥語によつて青草の意に解するが、「骨利幹」と對を成す點から考えてやはり部族名であるかも知れず、とすればやはり回紇の一部族名である「葛邏祿」がやや近い。また「斡(翰)海上(尙)由(猶)鳴愛々」の「翰海」は、太宗の時、「迴紇部を以て瀚海府と爲し、其の俟利發吐迷度を拜せしめ懷化大將軍兼瀚海都督と爲す」と『舊唐書』の「迴紇傳」にあるように、もと回紇の故地であった。その他、葬禮の場で、「衙官坐(哭)位(泣)刀離(斃)面」とある「斃面」は、杜甫の「哀王孫」詩に、「聖德北のか

た南單于を服せしめ、花門面を斃りて恥を雪がんとことを請う」と見え(花門は回紇の別稱)、回紇に降嫁した唐の寧國公主が、可汗の死に際して、「廻紇の法に依りて斃面大哭」(『舊唐書』「廻紇傳」)したというように、當時一般に回紇の風習と見なされていたようである。突厥や回紇を漢の匈奴に擬するのは、杜甫の詩をもち出すまでもなく、唐代特有の常套的修辭であり、當時の人々の意識がおそらくそうであった。「叩角吹螺九姓圍」の「九姓」も、突厥と回紇にかかわる唐代特有の呼稱である。<sup>⑤</sup>

「王昭君變文」には「蕃王」「蕃裏」「蕃家」などの語がしばしば見えるが、唐代の文獻で「蕃」は吐蕃の略稱として用いられることが多いようである。たとえば白居易の「新樂府・縛戎人」に見える「蕃中」「蕃法」などの語はすべて吐蕃を指している。その他、吐蕃にかかわる地名としては、開元十七年(七二九)に置かれて以来、吐蕃との間で争奪をくり返したことで有名な石堡城の名が、「石堡雲山接鴈門」と見えており、また「且有奔馳(馳)勃律」の「勃律」は、吐蕃の西、今のカシミールにあった Gilgit のこ

「王昭君變文」考(金)

とで、開元二十二年(七三四)に吐蕃に滅されたことが『舊唐書』の「西戎傳」などに見える。

この他にも、酒泉、龍勒、鴈門、岢嵐、金河、輪臺など作品中に見える地名は、みな塞外民族との交渉を語る文獻にしばしば見えるものばかりである(文末地圖参照)。なお「緱(綏)銀北奏(走)黃蘆泊 原夏南地持(馳)白(邨?)」の二句について、従来諸家の注は何も語らないが、筆者はこれを「綏銀より北のかた黃蘆泊に走り、原夏より南のかた白(邨)に馳す」と讀んで、「綏銀」「原夏」を綏州、銀州、原州、夏州の四地名と解する。これら長安北方、黃河以南の地は、「(武德)七年八月、頡利、突利二可汗、國を擧げて入寇し、道は原州よりす」「永隆元年、突厥また頡利の從兄の子阿史那伏念を夏州に迎え、將に河を渡り立てて可汗と爲さんとす」(以上『舊唐書』「突厥傳」)、また「(貞元二年)十二月、夏州を陷る」「又銀州を寇す」(『舊唐書』「吐蕃傳」)と見えるように、塞外民族が唐の領内に侵入する際の通路に當っていた。「黃蘆泊」は、長慶元年(八二二)太和公主が回紇に降嫁した際に、「廻鶻七百六十人、駝馬及び

車を將ちて、相次して黃蘆泉に至りて公主を迎候す」(『舊唐書』「迴紇傳」とある「黃蘆泉」のことであるいはあるかも知れない。以上、この作品の中の固有名詞や地名は、すべて初唐から中唐に至る間の塞外民族との交渉を反映したものと讀める。次にその點を考える上でもう一つの重要な問題である和蕃公主について述べよう。

唐は國初より周邊の諸民族を懷柔するために、いわゆる和蕃公主を頻繁に用いている。まず突厥については、すでに隋代に突利可汗に安義公主を、また啓民可汗に義成公主を降嫁させているが(『隋書』「北狄傳」)、唐に入ると突厥の勢力が衰えたせいもあり、わずかに處羅可汗の子の阿史那社余に高祖の女、衡陽公主が嫁した例があるのみで(『冊府元龜』卷三〇〇)、睿宗の時の金山公主の降嫁は結局實現しなかつた(『舊唐書』「突厥傳」)。しかし回紇と吐蕃に對してはかなりの數の公主が和蕃の美名のもとに、人身御供として化外の地に送られた。以下、資料<sup>⑦</sup>によってそれらを列舉してみよう。

吐蕃

1 太宗の貞觀十五年(六四二)、宗女を文成公主とし、  
 棄宗弄讚贊普に嫁せしむ。永隆元年(六八〇)公主薨じ、高宗は使を遣わしてこれを弔祭す。

2 太宗の神龍元年(七〇五)、雍王守禮の女を金城公主となし、棄隸隨贊贊普に嫁するを許す。開元二十九年(七四二)公主薨じ、吐蕃は使を遣して告哀す。

回紇

1 乾元一年(七五八)、肅宗の幼女を寧國公主に封じ毗伽闕可汗に出降せしむ。同二年、可汗死し、公主は子無きを以て唐に歸る。

2 代宗の大曆四年(七六九)、僕固懷思の女を崇徽公主に封じ、英義可汗に嫁せしむ。

3 貞元三年(七八七)、徳宗の女、咸安公主、武義成功可汗に嫁す。元和三年(八〇八)公主薨す。

4 長慶元年(八二二)、憲宗の女、永安公主を保義可汗に下嫁せしむることを許すも、たまたま可汗死し、止めて行かず。

5 長慶元年、憲宗の女、太和(安定)公主を崇徳可汗

に嫁せしむ。會昌三年（八四三）公主歸國す。

これら諸公主のうち、吐蕃に嫁した文成、金城兩公主と回紇に嫁した咸安公主は、王昭君同様胡地に歿している。

文成公主はチベットに初めて佛教を傳えたことで名高いが、これらの公主の境遇には人々の興味と同情が集まつたらしい。金城公主降嫁の時、中宗は「悲泣歎歎することこれを久しうし、因りて從臣に命じ詩を賦して餞別せしむ」と『舊唐書』「迴紇傳」にあるが、その時の馬懷素、薛稷、沈佺期、武平、趙彥昭、鄭愔、徐堅等諸臣の應制の作が今なお残されている<sup>④</sup>。また金城公主自身の玄宗に宛てた書翰及びそれに對する玄宗自身と張九齡の代作による返書も、やはり今日に傳わつており、公主の切なる望郷の念とその慰撫に苦慮する帝王の心情との間に存在する微妙なずれをそこに讀み取ることができる。さらに咸安公主については、白居易に「祭咸安公主文」〔『白居易集箋校』卷五十七〕があり、その中で白氏は、「故郷返らず、烏孫の曲空しく傳わり、歸路遙かといえども、青塚の魂は復す可し」と、咸安公主を漢の武帝の時の和蕃公主であつた烏孫公主および王昭君に

擬しているのである。

白居易のこの感想は、おそらく當時の大多數の人々の共有するところであつたろう。王建の「太和公主和蕃」詩〔『全唐詩』卷三〇一〕が、「琵琶淚に溼りて行聲小なり、人の腸を斷ち得るは多きに在らず」と、やはり公主の降嫁から琵琶を通して王昭君を連想しているのは、そのことを裏づける。とすれば「王昭君變文」の中にこれら和蕃公主の影を見ようとするのも、決して見當ちがいは言えまい。「變文」が、「公主時亡（亡時）僕亦た死す」、また、「維年月日、謹んで清酌の奠を以て、漢の公主王昭軍（君）の靈を祭る」と、王昭君を漢の公主とするのは、言わば白居易の「祭咸安公主文」と逆の見立てであらう。『漢書』の「匈奴傳」は、「單于自ら言わく、願わくは漢氏に婿となりて以て自ら親しまんと。元帝は後宮の良家の子、王嬪字昭君を以て單于に賜う」と述べるのみで、王昭君が公主になつたとは言わない。王昭君を公主することは、史實はむろん、その他の傳説や文學作品にも見えないのであつて、唐代の和蕃公主を王昭君に擬する發想から影響を受けたものに相

違なからう。またそもそも「變文」の最後に漢使が青塚で王昭君を弔い祭詞を讀むという趣向自体も、「祭咸安公主文」に「皇帝某官某を遣わし庶羞の奠を以て、祭を故咸安大長公主親藩毗伽可敦の靈に致す」とあるような唐代の習慣の反映であったと思える。

長慶元年、回紇に嫁した太和公主を最後に、和蕃公主の降嫁は行われなくなる。和蕃公主は初唐から中唐にかけての特異な現象であった。「王昭君變文」は、比較的早く減じた突厥の名が五度も見えること、突厥、回紇、吐蕃にまつわる地名が、地理關係を無視してやや混亂した形で現れる點などから考えて、一時の作ではなく、初唐から徐々に形成され、中唐に至って完成したものと見て大過ないであろう。それは言わば、和蕃公主が行われた時期の産物であった。この推定は、文中に「八百餘年後」と言うのともうまく符合しよう。

中唐期に回紇に嫁した寧國、咸安、太和の三公主は、それまでの和蕃公主が公主とは言いながら、實際には宗室の遠縁の女に過ぎなかったのに對して、共に皇帝の親女であ

った。それは回紇問題の深刻さを物語ると共に、人々の和蕃公主に寄せる關心がいやが上にも高まったことを示唆しよう。「王昭君變文」がこの時期に現れた背景がそこにある。

なお回紇、吐蕃との緊張關係は、時事問題の最たるものとして、當時の詩人たちによっても歌われている。その代表は、言うまでもなく「陰山道」「縛戎人」「城鹽州」など、白居易の「新樂府」であろう。白居易は「祭咸安公主文」のほか太和公主の封制（『白居易集箋校』卷五三）をも書いており、和蕃公主とは淺からぬ因縁を有していた。「陰山道」に「咸安公主可敦と號し、遠く可汗の爲に頻りに奏論す」とあるのは、彼のこの問題への關心のもう一つの表れであった。しかも「王昭君變文」と白居易の作品の間には、實は見逃すことのできない共通點がある。

### 三 白居易の作品と「王昭君變文」の性格

陳寅恪は「陰山道」の「紇邏敦肥水泉好」の句に注して、「王昭君變文」の「邊草叱（吒）沙紇邏分」を引いた。し



かし「王昭君變文」と白居易「新樂府」の間の字句の類似はこれにとどまらない。

「變文」の「所好成毛羽、惡者城（成）瘡癩」に對して、從來の注は張衡の「西京賦」の「所好成毛羽、所惡成瘡瘡」を出典として擧げるが、ここはそれと共に「新樂府・太行路」の「好生毛羽惡生瘡」を是非とも引くべきところであろう。また先に筆者は、「緹（綏）銀北奏（走）黃蘆泊原夏南地持（馳）白□（邨？）」の二句を綏、銀、原、夏四州のこととして解したが、「新樂府・城鹽州」には「靈夏潛安誰復辨、秦原暗通何處見」と同巧の句づくりが見えてゐる。

さらに對象を「新樂府」以外にまで廣げると、「變文」の「紅臉偏承寵、青娥侍宴時」の二句は、「長恨歌」の「始是新承恩澤時」「承歡侍宴無閑暇」等の句を容易に連想させるし、「變文」の「不應玉塞朝雲斷 直爲金河夜夢（夢）連」（應に玉塞に朝雲斷たるべからず、ただ金河に夜夢連なるが爲に）は、白居易「花非花」の「來如春夢幾多時 去似朝雲無覓處」と着想を共有しよう。また漢使の青塚で

〔王昭君變文〕考（金）

の祭詞の末尾、「身「誰？」歿於蕃裏、魂兮豈忘京都。空留一塚齊天地、岸兀青山萬載孤」は、すでに引いた「祭咸安公主文」の末尾、「歸路雖遙、青塚之魂可復」と同巧である。

このような「變文」と白居易の作品との類似表現が、果して「變文」が當時はなはだ人口に膾炙していた白居易の作品を模倣した結果なのか、それとも兩者は同じ文學的風土から別々に生まれたもので、表現を共有するに過ぎないのかは、にわかには決め難いであろう。しかしながらいづれにせよ、それは世によく言われる白居易文學の「俗」「淺切」そして言葉の過剰などの特徴を、白氏の作品の背後から説明し、立證するものであると思える。白氏及びその盟友、元稹の長篇律詩なども、變文における韻文との關連において検討してみらるべきであろう。

と同時に、問題を「王昭君變文」の側に引きつけて考えるならば、右の點は、「變文」を講釋師の種本もしくは繪解きの際の臺本であったとする從來の説に再検討を迫るものとなるであろう。たとえば「維年月日、謹以清酌之奠、

祭漢公主王昭軍（君）之靈」で始まる「變文」の漢使の祭詞は、文字の亂れがかなりあるとはいえ、唐代の有韻の祭文の形式をほぼ完全に備えており、唐人の文集中に置いてさほど不自然とは思えない。またその詩の部分も、修辭の稚拙は免れないものの、古典詩の範疇を大きく逸脱するものではない。これらを耳で聞いただけで理解できるとすれば、それはかなりの教養をもった者に限られるであろう。むろん理解の次元とは相對的なものであり、今日の理解の尺度をもって古人の理解の性質を測ることに慎重であらねばならない。また當時、琵琶の伴奏による王昭君の語り物が盛行していたことは、杜甫や吉師老の詩に見える通りである。民間の藝能が古典文學と無縁であるという速斷が危険であることも言うまでもない。張説の「伎人の爲に元十郎を祭るの文」(『全唐文』卷二三三)は、故主を失なった伎女藝人のための代作であるが、祭文といったものが當時一體どの階層にまで用いられたかを窺わせ、それが藝能に取り入れられてゆく經路をも示唆する點で興味深い。

にもかかわらず今日殘された寫本が、多くの聽衆に聞か

せるためだけのものであったかどうかには、なお疑問が殘る。もしそれが種本、臺本であったならば、「上卷立鋪畢、此入下卷」などという文句は却って不用であろう。そういう意味で、變文はあたかも明代の擬話本の如く、種本、臺本を裝った讀み物であるとする説は正鵠を得ているように筆者には思える。變文の寫本は、實際の語り物に基づきながらも、それをさらに修辭的に高めた讀み物として、文字を媒介に流通していたのではあるまいか。「王昭君變文」では、「孝哀 皇帝」と「皇帝」の上をわざわざ一字分空格にしているが、これなども複数の人に讀ませるために、當時の書寫の規範に従ったものと解せよう。變文のこのような見せかけは、民間から採取された歌謠を裝った「新樂府」の趣向に通じる。

なおおそらくは「王昭君變文」が吐蕃占領下の敦煌で作られたと考えたためであろう、この作品の中に占領下の漢人の故國への愛慕の念と吐蕃に對する民族感情が反映しているとする説がある<sup>⑩</sup>。むろんその可能性は否定できないが、すでに見た如く和蕃公主の問題は唐の中央でも大きな關心

事となっており、また王昭君の語り物が四川でも行われていたことから考えても、問題をそこに限定する必要はないように思われる。ましてこの作品が語っているのは、王昭君の漢に對する愛慕の念ばかりではないのである。

#### 四 「王昭君變文」の文學性

「王昭君變文」において、一方の當事者である元帝が王昭君にいかなる感情をもっていたかは、残念ながら上巻の大半が失われたためもあって知ることができない。しかし殘存部分を見る限り、「君王不見追來」、つまり元帝は彼女を呼びもどしてはくれなかつた（追は追還の意）。しかも王昭君の死に際し、「龍庭に表奏するも、□勅未だ至らず」とあるように、漢の朝廷は當初何ら反應を示さない。漢が弔使を送ったのはのち哀帝の時になってからである。元帝もしくは漢の朝廷は王昭君に對して冷淡であつたと言えよう。

これと對照的なのは單于の王昭君への愛情の深さである。快々として樂しまぬ王昭君を見て、單于はまずその歡心を

買うために大規模な狩を催す。彼女の病氣には、「單于はこれ蕃人といえども、夫妻の義重きを那ともするなく、頻りに借問す」と情愛を示し、病いが進めば、「公主亡き時は僕も亦た死せん、誰か能く後に在りて孤魂を哭さん」とかきくどき、葬禮では、「早くに死若（後）沙裏に埋めらるるを知らば、君をして帝郷に還らざらしむを悔ゆ」と悔恨にくれる。漢使に語つた「乍可陣頭に馬を失却うとも、那ぞ老いに向いて更に妻を亡くすに堪えん」に至っては、その比喩の具體さ故に一層の哀切を誘う。「王昭君變文」のテーマは、王昭君の漢への怨慕と共に、あるいはそれ以上に單于の王昭君に對する一途な愛である。王昭君をテーマとした歴代の詩歌の中には、たとえば隋の薛道衡「明君詞」に、「何ぞ單于の重んじるを用いん」とある如く、單于の王昭君への寵愛に觸れるものがないではないが、それはあくまでも王昭君の悲嘆をより效果的に描くための一つの道具立てに過ぎないのであつて、「變文」のように單于の愛情を正面から取り擧げた例を他に知らない。元の馬致遠「漢宮秋」雜劇は、元帝の悲しみをもつばら描いて從來の

王昭君中心の舊套を脱した作品として名高いが、その前に「王昭君變文」のあったことは、文學史上に閑却されている。

吉川幸次郎博士はかつて「漢宮秋雜劇の文學性」(『吉川幸次郎全集』卷十五)において、王昭君物語を題材とし元帝を主役とする元代のこの戯曲が、皇帝という極限情況にいる人物を借りて、人間永遠の戀愛の普遍的感動を描いている點で新鮮であり、過去の中國文學の中にその類例を見出し難いと述べられた。しかし「王昭君變文」は、同様の感動をやはり一種の極限情況にいる單于の身の上に實現したものであろう。王昭君の葬禮に際して「劍を解き天子の服を脱除し、披頭して還た庶人の装を着」けた單于の姿には、天子の愛情が庶人のそれと何ら變らないことが直截に表現されている。あるいは異族の天子であるだけに、その普遍性はより一層強烈に傳わつてこよう。「漢宮秋」の元帝は、臣下の裏切りと怯懦によって王昭君を失い、孤獨へと追いやられたが、變文の葬禮の場の「首領は盡く雲雨の如く集まり、異口皆戰場に闘わんと言う」が、王昭君の死を機に

臣下たちが漢に戦いを挑もうとしていることを意味するとすれば、情況は逆ながら單于も元帝と同じ孤獨を味わったことになる。二人の孤獨は共に、帝王として君臨せねばならぬことに由来するのである。しかしながら單于の孤獨は元帝のそれよりも深かつたであろう。

それは單于の愛する王昭君が單于を愛さなかつたからに他ならない。「假使邊庭に突厥の寵あるも、終歸に漢王の憐れむに及ばず」、單于の愛する王昭君は單于を愛さず、王昭君の慕う漢の元帝は王昭君を顧みない。そういう意味でこれは、片思いの文學であると言えよう。しかもそれはただの片思いではなかつた。すでに述べた如く、この作品での王昭君は漢の公主ということにされている。したがって「昔日は還お漢帝の恩を承く」る身であつた王昭君は、元帝の愛人であると同時に少なくとも形式的にはまたむすめでもあつたことになる。そして單于にとつての元帝は、戀仇と同時に岳父にも當たる理窟である。すなわちここに描かれているのは、片思いの文學であると共に、また亂倫の文學でもあつた。片思い、しかも男の方からの片思いをテ

一マとする作品は、後世の戯曲や小説に見られるもの、中國文學史上その例に乏しいであろうが、亂倫の文學となるときさらに珍しい。あえて類例を求めるとすれば、それは「王昭君變文」と同時期の、白居易「長恨歌」に代表される楊貴妃についての傳説と文學ということになろう。

楊貴妃が玄宗の子、壽王の妃で元來あったことを「長恨歌」は尊者のために諱んだが、陳鴻の「長恨歌傳」の方では、「弘農の楊玄琰の女を壽邸に得たり」とそのことが述べられている。言うまでもなく白居易を含め當時周知の事實であった。また安祿山が楊貴妃の養子となり、二人の間に私かな愛情関係があったこと、安祿山の亂がこの愛情關係のもつれと安祿山の嫉妬に由來するものであったこと、いずれも當時著名な風聞として姚汝能『安祿山事蹟』などに見え、のち元代の白仁甫「梧桐雨」雜劇、また王伯成「天寶遺事」諸宮調共にそのことに言及する。「變文」での單子はさしずめ安祿山の役回りであろう。「梧桐雨」雜劇は玄宗の孤獨をテーマとした作品であるが、その孤獨は單に楊貴妃を失ったためばかりではなく、また愛する者の裏切り

に由る點で、單子のそれに幾分似通ったところがある。そしてそのような絶望的孤獨感は、右の如き文脈をその解釋に持ち込んでみれば、「長恨歌」の「綿々として絶える期無き恨み」の中にもやはり何ほどか搖曳していると感じられる。「昔日同に眠るとき夜は即ち短きに、如今獨り寢れば天の長きを覺ゆ」という單子の歎きは、「長恨歌」の「遲々たる鐘鼓初めて長き夜、耿々たる星河曙けんと欲る天。鴛鴦の瓦冷かに霜華重く、翡翠の衾寒くして誰と共にせん」に通ずるであろう。そこには衾を共にし夜を短いと思ったのも所詮は幻、といったある種の諦念があると讀める。

「長恨歌」は「漢家天子の使」である「臨邛の道士」が、「海上の仙山」に楊貴妃の魂を尋ねて行くところで終っている。一方「王昭君變文」の結末は、漢の使者、楊少微による青塚での王昭君の亡靈に對する弔祭であった。この楊少微は架空の人物と思えるが、少微はおそらく少微の誤りであろう。少微は處士、もしくは方士的な人物を指す語である。一例を挙げれば、則天朝の王隱客、字は少微（『全唐文』卷二〇五）の姪、王琚は、「玄宗合鍊の學」をもって玄

宗に仕えた人物であり、『舊唐書』卷一〇六、王少微もその同類であつたかと思われる。「長恨歌」と「王昭君變文」の類似はここにも見られるのである。兩者のこのようなテーマと構成の共通點は、先に述べた「變文」と白居易文學との類似に照應するものであろう。

楊貴妃と玄宗、安祿山をめぐる風説は、皇室や有名人に對する人々の多分にゴシップ的な興味の所産であつたろう。それはいかにもメロドラマチックであるが、それだけに説得力と普遍性をもつ。そしてこのありきたちの圖式を、やはり當時の人々にとって興味深い存在であつた和蕃公主問題、その投影としての王昭君、元帝、單于の關係に應用し、『安祿山事蹟』と同じく、政治上の問題を個人の愛情のもつれにすり替えたところに、「王昭君變文」は生まれたのではないだろうか。

ちなみに日本の謠曲「昭君」は、やはり「王昭君變文」といくつかの共通點をもつように思われる。謠曲の「昭君」は、これまた白居易の詩「王昭君」を一つのヒントとして作られたと言われ、故郷に残された父母の歎きに始まり、

王昭君を慕うあまり鬼と化した單于の怨みをもつて終る。

王昭君をテーマとする數多の詩歌の中でその父母にふれたものは、わずかに『琴操』に見える「王昭君怨歌」の「父兮母兮道里悠長」ばかりであるが、「變文」では「遠く恨む家人の魂を昭（招）取るを」また「慈母只今何こに在りや」と二度にわたり言及される。そして何よりも酬われぬ愛の言葉を綿々と語る「變文」の單于の姿は、謠曲における單于の鬼相に重なるであらう。もしもこの兩者の間に影響關係があつたとすれば、それは「王昭君變文」もしくはそれに類する物語の唐代以降における流行の廣がりを示唆するものに他ならない。謠曲の後ジテたる單于のせりふ、「とげつと言つし旅人なり」が「突厥といひし虜人」の訛であるとす説は、その一つの傍證となりえよう。

文學の最大のテーマは戀愛であり、その中でもっとも人を惹きつけるのは片思いと不倫である、これはヨーロッパあるいは日本の文學においては事實であるが、中國の文學には當てはまらないとするのが、從來のおおむねの考え方であつた。「王昭君變文」は、そのような文學が中國に

も存在することを物語る貴重な作品であろう。そしてそこから、たとえば「源氏物語」までの距離は、今日われわれが考えるほどには遠くないかも知れないのである。

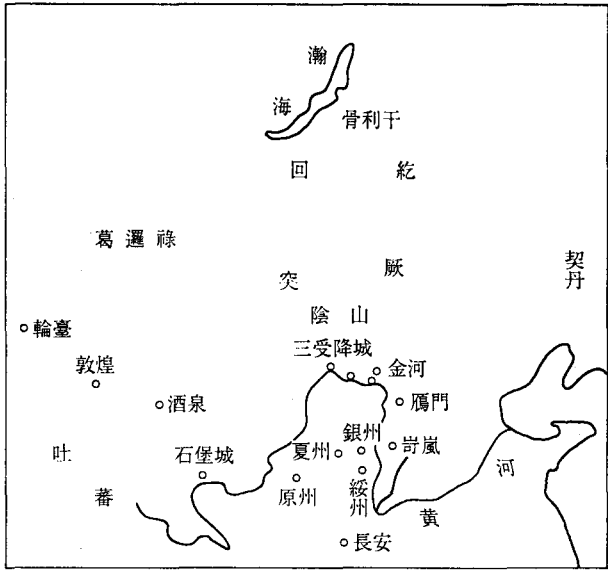
注

- ① 「敦煌本王昭君變文校注」(『慶應義塾大學言語文化研究所紀要』第二十四號一九九二)。なお以下の引用や句数はすべてこれによる。□は不明字、( )は校定字、「」は意補の字を示す。
- ② 金文京「詩讀系文學試論」(『中國—社會と文化』七號 東大中國學會 一九九二) 参照。
- ③ 根本誠「王昭君變文成立年代考」(『東洋文學研究』九號 早稻田大學 一九六一)、鄭文「王昭君變文創作時間臆測」(『西北師院學報』社會科學版 一九八三—四)。
- ④ 『元白詩箋證稿』第五章「新樂府」。
- ⑤ 桑原隲藏「隋唐時代に支那に來往した西域人について」(『桑原隲藏全集』第二卷 岩波書店 昭和四十三)。
- ⑥ 「地」と「持」は各々「馳」の字形の近似と普通による訛と解する。
- ⑦ 『新・舊唐書』の「吐蕃傳」「迴紇(鶻)傳」、『新唐書』「諸帝公主傳」。崇徽公主については『唐大詔令集』卷四二。
- ⑧ 『全唐詩』卷九三・九六・一〇二・一〇三・一〇六・一〇七に薛稷「奉和送金城公主適西蕃應制」以下諸人の和作を收

「王昭君變文」考(金)

む。

- ⑨ 玄宗「賜金城公主書」(『全唐文』卷四〇)、金城公主「乞許贊普請和表」「謝恩賜錦帛器物表」「請置府表」(同上卷一〇〇)、張九齡「勅金城公主書」(同上卷二八六・二八七)。
- ⑩ 川合康三「白俗の検討」(『白居易研究講座』第五卷 勉誠社一九九四) また「ことはの過剰—唐代文學の中の白居易」(同上卷二) 参照。
- ⑪ Victor H. Mair, *T'ang Transformation Texts*. Cambridge: Harvard Univ. Press, 1989. Chapter Five. Performers, Writers, and Copyists.
- ⑫ 注③所掲鄭文論文。
- ⑬ 「龍庭」は一般には匈奴の朝廷を指すが、敦煌曲子詞の「菩薩蠻」に「敦煌古往出神將、感得諸蕃遙欽仰。效節望龍庭、麟臺早有名」とあるのと同じく、ここでは漢の朝廷を指す。
- ⑭ 「昭君」については日本古典文學大系40『謠曲集(上)』(岩波書店 昭和三五)による。また川口久雄「敦煌變文の素材と日本文學—王昭君變文と我が國における王昭君說話」(『金澤大學法文學部論集』文學篇第十一號 昭和三八)はこの問題を扱うが、變文と謠曲の關係には言及がない。
- ⑮ 注⑭所掲『謠曲集(上)』の頭注。



「王昭君變文」主要地名圖